



懐かしい名前。マリウス・コンスタン！ このラヴェル《夜のガスパール》(1988)をオーケストレーションしていた当時のコンスタンの活動は、本当に目映いばかりだった。指揮者として、演劇や映画音楽の作曲家として、そしてパリ国立高等音楽院教授としてブイブイ言わせていたものだ。

筆者はその頃同音楽院に在籍しながら、オーケストレーション科に入ったときには、もう一人の教授で、ブレーズの幼なじみとして知られるセルジュ・ニグのクラスを選んだ。しかし、今回この編曲作品の手腕を改めて見ると、少しでもコンスタンと話をしたかったと、いまはちょっと後悔している。

ラヴェルのオーケストレーションは、精密であるが非常に油彩的で、ドビュッシーの、いま

流で言う“透け感”のあるガラス細工のような手法とは一線を画す。

それは、フランス・バスク地方の出身で、大西洋の海とそこに照らす強い陽射しを見て育ったから、と言われているが、実際はとても早くパリに移住している。そもそも「ラヴェルの生家」として知られるフランスの南西部シブールのアパートメントは、実はラヴェルの伯母がコンシェルジュ(門番)をしていた建物で、そこに立ち寄った妹が産気づいてそのままラヴェルを出産しただけ(筆者未確認情報)、というのも、いまはモンフォール・ラモリの「ラヴェルの家」の語り部の女性が、来場者に得意げに吹聴している。

この「ラヴェルの家」を訪ねると、普段の生活様式と、この作曲家の几帳面さをとてもよく見て取ることができる。思いのほか天井が低い。これでラヴェルの身長があまり高くなかったこ

とがわかる。そして壁一面に絵が掛けられていて、たくさんの精巧なおもちゃ類が棚に整然と置かれているのに驚く。ラヴェルは子どもの心を持っていたのだ。そして極めつきは浴室の日用品の数々。たとえばひげ剃り道具が、生前そのままに、きっちりとあるルールに則って美しくひとつひとつ並べられている。黒と白のボーダーでまとめられたタオル、床、壁紙なども印象的であった。

この潔癖さが、オーケストレーションにも表れている。隙がない。オーケストレーションの穴を恐れるあまり、必ず補強の声部が加えられている。たとえば前後に続く2つのフレーズに2種の管楽器がそれぞれ用いられていると、その継ぎ目にほかの楽器が補強されている。ラヴェルは自分の作品が完璧に演奏されないことを非常に心配した作曲家の一人であった。また、思惑と異なり大成功を収めた《ボレロ》など、演奏されるのが嫌でいやで、その時間は演奏会場のロビーで過ごしたというのは有名な逸話である。

フランスの作曲家は、通常〈ベルリオーズ〉〈カゼッラ〉〈ケックラン〉〈リムスキー＝コルサコフ〉の『管弦楽法教程』を読んで勉強する。その上、われわれのすぐ前の世代にラヴェル、ドビュッシーの2大管弦楽の大家がいるのだから、オーケストレーションの参考文献には事欠かない。

ピエール・ブレーズと同一年のコンスタンも、作曲法や管弦楽法の技は確かであった。そして、何よりも自らアンサンブル・アルス・ノーヴァを立ち上げて指揮者としての経験を積んだことから、“楽器法の効果”をよく識っていた作曲家であった。

ラヴェルのピアノ曲は、どれも管弦楽を見据えた書式で書かれている。《マ・メール・ロワ》のピアノ連弾譜を見てもどの楽器をどこに想定し

たかが容易にわかる。そして作曲家自身の編曲では、器楽の特性を活かして音型を変えたり、反復フレーズの回数を多くするなど柔軟に対処する以外は、極めてまっとうな、奇を衒わない管弦楽法の手法を見て取れる。

《夜のガスパール》は、ピアノ技巧の極地の作品である。こんなにピアニスティックな作品をいかにオーケストレーションするか。

しかし、どの観点からもやはり《夜のガスパール》も極めてオーケストラ的な楽曲で、作曲家なら管弦楽化を試したくなる作品でもある。

そこでコンスタンのオーケストレーションを細かく見ると、管楽器の重ね方が、ラヴェルとまたひと味違った音響を目指していることが解る。ラヴェルの考えの延長線上にいて、でもさらにカラフルになっているのである。

フルートの書式は、《ダフニスとクロエ》第2部のフルート3種の競演の部分や、ほかにもラヴェルが得意としたフルートの書式のいろいろ、メランコリックな表情から華麗な飛翔の表現を参考にしただけに違いない。

〈オンディーヌ〉の最初の音楽的背景を作る和音の連打など、ピアノに課す方がいじわるで、これは木管楽器の扱いに長けていたラヴェルならではの発想であるから、その通りに編曲がなされている。

〈絞首台〉では、ラヴェルは思いつかないであろうメロディを、特徴ある音色で浮き上がらせているのが面白い。そして〈スカルボ〉の鮮やかな色彩感。これは、ピアニストが是非聴くべき傑作である。

なお、〈オンディーヌ〉は《ダフニスとクロエ》への、〈スカルボ〉は《左手のためのピアノ協奏曲》へのオマージュであることは疑いようがない。

さあ、ラヴェルのアイディアを凌駕したすばらしい響きを、たっぷりとお楽しみいただきたい。